

【ポスター発表】

「超多様性」社会におけるソーシャルワークの多文化共生アプローチ
— 「インペアメント文化」を包摂しながら —

○ 関西学院大学 松岡克尚 (1808)

原 順子 (四天王寺大学・1134)、宮崎 康支 (関西学院大学客員研究員・9599)

キーワード：多文化共生・超多様性・インペアメント文化

1. 研究目的

“Superdiversity”（「超多様性」）とは、人類学者のバートベック（Vertovec, S.）がロンドンにおける移民の状況から引き出した概念であり、エスニシティだけで多様性を論じても現状を説明することができず、その他の様々な要因を掛け合わせた“diversification of diversity”の必要性を示したものである（Vertovec 2007:1025）。フェミニズム発祥のインターセクショナリティ概念が、ジェンダーなど個人の有する様々なアイデンティティの重なりによって差別や優越位置の分析を試みるのに対して、「超多様性」は多様なものが、多層的、動的に存在している状態を示しており（山西 2011:15）、そこから社会科学的、政策的な課題を導出する源になる役割が期待される。

Vertovec がいう「超多様性」については、ヨーロッパの、それも都市部においてのみに見られる現象に過ぎないという指摘がある（Bradby et al. 2017）。しかし、日本における多文化共生に対する、ある種の硬直した「思い込み」ないし「先入観」の存在を鑑みた場合、「超多様性」はそうした壁を乗り越え、SOGIE や障害（インペアメント）なども含めて日本社会での新たな多文化共生の在り方を論じる際の新機軸になり得ると考えた。

上記の問題意識を出発点に、本報告はソーシャルワークの立場から今後の日本における多文化共生アプローチを展開するにあたり、「超多様性」概念が有する意義と課題を整理し、特に「障害」もまたその射程に含めることの可能性を探ることを目的とした。

なお、この報告は JSPS 科研費（22K01998）から助成を受けたものである。

2. 研究の視点および方法

先行研究レビューを実施した。なお、「障害」も多様性を構成する一要因として検討するに当たっては、それを医学的現象ではなくひとつの文化的現象として把握することが必要になってくる。その際には、インペアメント文化の考え方がこの課題への解答になり得る。インペアメント文化とは、インペアメントのある身体が紡ぎ出した生活様式・傾向であり、環境との間による共同産物を意味している。同時に、それはインペアメントを有する者の対環境戦略であり、当該環境内での「生きる戦略」や「経験知」を構成する（松岡ほか 2019）。今回、このインペアメント文化概念を介することで「障害」を多文化共生アプローチに位置づけるべく、理論的な検討を試みた。

3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会「研究倫理規程」等を順守して行った。

4. 研究結果

先の目的を果たすために、(1) まず今日の多文化共生論が抱える課題を探り、(2) その課題に対して「超多様性」概念が果たし得る貢献を確認した。そして、(3) これまでソーシャルワークが「超多様性」概念をどう扱ってきたかについて探りつつ、(4) エスニシティ以外の要因として「障害」に焦点を当て、それがこの新しい多文化共生アプローチにどう位置付けられ得るのかについても考察を試みた。

(1) (2) について、政府や自治体が推進する「多文化共生」とは、日本への移民を念頭に置いており、ホストたる日本社会の多様性を論じることなく、新たな移民をどう「統治する」という視点に終始していることが確認できた(先に言う「思い込み」「先入観」)。「超多様性」はこうした状況に一石を投じる力になり得る。また先の(3)は、移民によってもたらされる「超多様性」がソーシャルワーカー養成や教育に与える影響(Hendriks & van Ewijk 2019)、あるいは利用者のバルネラビリティ増大への対処(muddle through)と複雑性への管理が求められているという指摘(Van Robaey et al 2018)などソーシャルワーク自体への影響を中心に論じられており、“diversification of diversity”を「障害」も含めて深化させる議論は、管見の限り見られないことが把握できた。

5. 考察

「超多様性」概念が移民研究から導出されたこともあり、ソーシャルワークでもエスニシティに軸が置かれ、“diversification of diversity”に伴う利用者の変化やワーカー養成への影響を論じることが主流であった。エスニシティを軸にした「超多様性」に関する欧米の経験は、日本のソーシャルワーク実践にも有用になると考えられる。しかし、エスニシティ以外にも含めた多様性の議論はなされておらず、ソーシャルワークにおいても一種の「真空地帯」になっている。先の(4)について、日本での多文化共生のイメージや論じられ方の現状を考えた場合、「超多様性」導入は現状打破をもたらし得る可能性を確認することができた。例えば、SOGIE などに加えて「インペアメント文化」も含めることで、“diversification of diversity”をソーシャルワークの土壌で論じられる可能性を見出せた。

【引用文献】

- Bradby, H., Green, G., Davison, C., & Krause, K. (2017) “Is superdiversity a useful concept in European medical sociology?” *European medical sociology*?. *Frontiers in Sociology*, 1, 17.
<https://doi.org/10.3389/fsoc.2016.00017>
- Hendriks, P., & van Ewijk, H. (2019). Finding common ground: How superdiversity is unsettling social work education. *European Journal of Social Work*, 22(1), 158-170.
- 松岡克尚・原順子・宮崎康支 (2019) 「ソーシャルワークにおける『身体』の位置付に関する考察」日本社会福祉学会第67回大会、2019年9月22日、大分大学。
- Van Robaey, B., van Ewijk, H., & Dierckx, D. (2018). The challenge of superdiversity for the identity of the social work profession: Experiences of social workers in ‘De Sloep’ in Ghent, Belgium. *International Social Work*, 61(2), 274-288.
- Vertovec, S. (2007) “Super-diversity and its implications.” *Ethnic and Racial Studies*, 30(6), 1024-1054.
- 山西優二 (2011) 「多文化共生に向けての居場所とは」シリーズ多言語・多文化協働実践研究 (13), 14-22.